

# 帰り道

anotherwork

## 序章

---

「お父さん、もう一つお話を聞かせてちょうだい。眠れないわ。」

マリアは父親をじっと見つめて言いました。父親は困惑した顔を浮かべて絵本を閉じました。家にある絵本はもう何度も読んであげたものばかりです。それに父親にはたくさんの絵本を買ってあげる余裕はありません。

「マリア、もう眠りなさい。明日は早く起きなければならないのだよ。」父親はやさしくマリアに言いました。マリアの通う学校は今まで長い間お休みでしたが、明日からまた学校が始まることになっています。

「わかってるわ、お父さん。でも、どうしても眠れないの。もう一つだけお話を聞かせてちょうだい。そうしたら、きっと眠れるから。だから、お願い、お父さん。」

父親は大きなため息をつきました。ふだんは鍛冶屋を営む父親には、自分の好きなように物語を作るなどできません。ましてや子供のためのお話など、父親には思いつくことができそうにありませんでした。そこで父親は子供の頃に聞いたお話を思い出そうとしました。しかし、思い出すのはどれも断片的で、何一つまとまったものはありません。

「なんとかしなければ」父親は心の中で自分に言い聞かせました。愛する一人娘は今自分に頼りきっています。その娘のために、どうしてもお話をしあげなければならないのです。父親は大きく息を吸って、そしてゆっくり吐き出しました。しだいに頭が空っぽになっていきます。

「だめだ」すぐに父親は思いました。「やっぱり鍛冶屋の私にはお話をすることなんてできない。」父親はマリアに謝ろうとしました。しかし、そのとき父親の脳裏に何か浮かびました。父親はもう一度大きく息を吸って、ゆっくり吐き出しました。そして、自分の頭の中に映っているものをよく見てみました。すると不思議なことに、そこには今まで見たことのない大きな森と、その真ん中をつきするように伸びる一本道がありました。

父親は思い切って頭の中に映っているものをそのまま話してあげようと思いました。その方が何も話さずに娘をがっかりさせるよりましのように思ったのです。そして、父親は無我夢中で話し始めたのでした。

「昔々、大きな森の一本道で……」

## 1章

---

「ルル、早く来いよ、遅いぞ！」

シリルは一本道を駆けながら言いました。ルルはあまり足が速くなかったので、兄のシリルについていくことができません。

「お兄ちゃん、待って！」ルルのそんな言葉が聞こえていないかのように、シリルはどんどん森の中へ入っていきます。そして、とうとうルルにはシリルの姿が見えなくなりました。ルルは仕方なく歩き出しました。どうせ、この森をつっきる道はこの一本道しかないのです。迷う心配はありません。シリルはきっと森の向こうにある家に先に着いて、自分の帰りを待ってくれます。それなら、この春のうららかな陽射しをたっぷり浴びた森の中を、のんびりと歩いた方がいいとルルは思いました。

小さな小鳥たちは、木の上にとまって心地よさそうにさえずっています。どこからか川のせせらぎが聞こえてきます。そして陽射しを浴びた草木は、まるで今日という日を待ちわびていたかのように、いちだんと際立って輝いています。ルルは古い歌を口ずさみながら、ゆっくりと森の一本道を進みました。

ちょうど一本道を半分ほど通った時のことでした。信じられないことに、ルルの前には道が二つに分かれています。しかも、どちらの道もちょうど鏡に映したかのように全く同じに見えるのです。ルルはどちらの道を通るべきか迷いました。もしかしたら、その道は自分の家がある方向とは全くちがったところへ導くかもしれないのです。

「お兄ちゃん、シリル兄さん！」

ルルは困り果てて叫んでみました。しかし、森の中はしんと静まったままです。ルルは仕方なく左側の道へ進んでみました。

森の中はさっきまでの道と何も変わらない様子でした。ルルはすっかり安心してまた古い歌を口ずさみながら進みました。ところが、突然雲行きがあやしくなりだし、雨が降り出しました。ルルは急いで駆け出しました。しかし、雨はどんどん強さを増していきます。どうしましょう？これだけ雨が強くふると、木の木陰でもずいぶん濡れてしまいます。ルルは雨宿りができるところがないか辺りを見渡しました。すると、少し先の方に古い小屋が見えました。ルルは雨に打たれながら、その小屋まで走りました。

## 2章

---

ルルが小屋の戸をたたくと、それはすぐに開きました。しかし部屋の中はしんと静まったままです。ルルはそのままじっと突っ立っていました。すると、もうすっかり腰を曲げたおばあさんがルルの前に現れたのです。

「おやまあ、珍しいこと。お客がやってくるなんて、本当に久しぶりだよ。」おばあさんは驚いて言いました。「さあ、つつたってないで、こちらへおあがり。」

ルルはおばあさんの後について部屋の中へ入っていきました。そしておばあさんが用意してくれたテーブルの椅子に座りました。

「さあ、お嬢ちゃん、雨で体が冷えてしまっただろう。こっちへ座って、暖まりなさい。」

ルルはストーブのそばに寄りました。おばあさんは台所から温かい飲み物を持ってきて、ルルの前に置いてあげます。

「お嬢ちゃんは、どこに住んでいるの？」おばあさんはたずねました。

「ここからもう少し行って、森を通り抜けたところです。」ルルが温かい飲み物を飲みながら答えました。

「おやおや、そうかい。意外と近くに住んでいたんだね。知らなかったよ。」おばあさんが言いました。ルルもまた、おばあさんがこんな近くに住んでいるとは知りませんでした。

「おばあさんは、ずっと前からここに住んでいるの？」ルルは訊ねました。

「ああ、そうだよ。」おばあさんは当然のように答えましたが、ルルには不思議でした。近くに住んでいるのなら一度くらい姿を見てもいいはずです。それなのに今まで一度だっておばあさんを見たことがなかったのです。

「私がまだお嬢ちゃんと同じくらいのときは、こんなところに住んじゃいなかったよ。お嬢ちゃんと同じように小さな村に住んでいたんじゃ。」おばあさんは昔をなつかしむように言いました。

「こんなところで一人で住んでいて淋しくないの？」ルルがたずねると、おばあさんは首を横に振りしました。

「もうすっかりなれちゃったよ。淋しいのは最初だけだったね。」

「どうしてこんなところへ？村に住んだ方がいろいろと便利なのに。」

「一人の方がずっと気楽に生きれるもんじゃよ。お前さんは家族といっしょに住んでいるんだね。」

「ええ、お父さんとお母さん。そしてシリル兄さんの四人で暮らしてる。」

「楽しいかい？」

「ええ。みんなで夕食を食べて、おしゃべりするときなんかはとっても。」

おばあさんはうなずきました。「お前さんはとっても幸せに暮らしているね。私も小さい頃はそうだった。お母さんと二人だけだったけれど、あれだけ楽しいことはなかった。」そう言って、おばあさんはうつむきました。

「おばあさんのお母さんは今何をしているの？」おばあさんは黙って首を大きく横に振りしました。

「お嬢ちゃんは何も知らない方がいいよ。私がなぜこんなところで一人で住むことになったのか。私と母がその後、どうなったか、なんてね。」

「どうして？」ルルは言いました。「私がまだ子供だから？」おばあさんは困惑した顔を浮かべました。

「お前さんの年頃では、まだ知らない方がいいこともたくさんあるんだよ。大人になってから、自然と分かることもあるのだからね。」

「教えてちょうだい。」ルルはむきになっていました。「私、大人の人に混じってお話することだって、たくさんあるのよ。知らないことだってたくさんあるけれど、もっといろいろなことを知りたいの。だから、おばあさんのお話も聞きたいわ。」おばあさんは少しの間考えてみました。そしてルルの真っ直ぐで、どこか力強い瞳をじっと見据えて言いました。

「それじゃあ、仕方がない。お嬢ちゃんに私の過去を見せてあげるよ。」

### 3章

---

おばあさんは椅子から立ち上がり、奥にある青いドアを開きました。

「さあ、お嬢ちゃん、こちらへお入り。」

ルルはおばあさんの言うとおりに部屋の中へ入りました。部屋の中は冷たく、明りがついていませんでした。ルルが怖くなって部屋から出ようとする、おばあさんはドアを閉めてしまいました。

「開けて、おばあさん！」

ルルはドアを叩きながら叫びました。しかし、おばあさんからの返事はありません。ルルはあきらめずにドアを叩き続けましたが、しだいに疲れ果てて床に座り込んでしまいました。さあ、どうしましょう？もう二度とこの部屋から出られないかもしれせん。ルルは言いようのない恐怖に駆られ、一人で泣きました。すると、突然、女の子の声がしました。

「お母さん、夕食はまだなの？」

部屋の中央には、見知らぬ部屋にいる女の子がぼっかりと浮かんでいました。ルルは手でそれに触れようとしましたが、何度試してもそれはすり抜けてしまいます。ルルはあきらめて、ただそこに映っているものを見つめることにしました。

「もうちょっと待っておくれよ。今、これが縫い終わるまでね。」女の子がいる部屋の向こうから母親の声が聞こえてきました。母親は器用な手つきでセーターを縫い上げていきます。母親のいる部屋の中にある棚にはいくつもの毛糸や布でびっしりと埋めつくされていました。

「お腹がすいたわ、お母さん。」女の子はお母さんのそばに寄り添って、食事をせがんでいます。

「はいはい、わかりましたよ。」母親は縫い物を中断して椅子から立ち上がりました。「すぐに準備するから待っておくれよ。」

「私も手伝うわ。」女の子が台所へ向かおうとすると、母親はそれを遮りました。「いいわよ、私だけで。」母親は女の子に言いました。「それより、この間頼んだものはもう縫い上げたのかい？あれは明日までにカシモフさんのところへ届けなければならないのだよ。」

「ええ、お母さん、大丈夫。ちゃんと縫い上げておいたわ。」

「そう、それならよかった。私たちがこうして暮らしていけるのは、カシモフさんをはじめ、私たちの縫い物を好んで注文してくださる人たちがいるからなんだよ。」

「分かっているわ。お母さん。」お母さんが台所に立って食事の準備をしていると、誰かがドアをどんと叩きました。

「レギーネ、ドアを開けてちょうだい。」母親は娘に言いました。レギーネと呼ばれる女の子がすぐにドアを開けると、そこには顔をこわばらせたビルテ婦人がいました。

「いったいどういうことなの！」

突然、ビルテ婦人は母親に向かって怒鳴りつけました。

「まあ、ビルテ婦人、そんなに興奮なさって、どうなされたのでしょうか。」

「どうなされたじゃないでしょう！これを見てちょうだい！」ビルテ婦人は、この間注文し、出来上がったばかりのドレスを差し出しました。

「サイズが全然合わないのですよ。これじゃあ、今日の舞踏会にも参加できはしないわ。」

「そ、そんなはずは……。確かに言われた通りのサイズでお作りしました。」

「それじゃあ、どうして着れないっていうの？」何も言い返せずにただ黙っている母親を見かねて、レギーネが口をはさみました。

「それはご婦人がお太りになったからじゃありません？サイズを測ったのは、もう三ヶ月も前のことでしたよね？その間に体型が変わってしまうのはよくあることなんですよ。」

ビルテ婦人の顔がみるみると真っ赤に染まっていきました。母親がなだめようとしたときには、ビルテ婦人はドレスを床に叩きつけていました。

「よくも私を侮辱したわね。もう絶対にあなた方を許さない。覚えていらっしゃい。」そう言って、ビルテ婦人は去っていきました。

「まあ、どうしましょう？」母親は動揺して言いました。

「お母さん、そんなに心配することはないわよ。」レギーネはそんな母親に平然と言いました。

「あんな人にドレスを作ってあげることなんてないわ。」

「本当に大丈夫かしら？」母親がたずねると、レギーネは言いました。「大丈夫よ。何も心配することないわ。」

## 4章

---

翌日は人々が待ちに待ったお祭りの日でした。この日は「大祝祭」と呼ばれ、村中の人々が広場に集まります。そして、みんなで踊ったり歌ったりおしゃべりしたりして楽しいときを過ごすのです。

「お母さん、そろそろ行きましょう。広場ではもうみんな集まっているわよ。」

この日のために美しいドレスを着たレギーネが言いました。しかし、母親は落ち込んだ様子で椅子から動こうともしません。母親は沈んだ声で言いました。

「まだビルデ婦人がドレスを取りにきていないのよ。」

レギーネはそんな母親に苛立たしく言いました。「お母さん、あんな人のドレスのことなんて、もう考えなくていいわ。それにあの人はもうドレスのことなんか忘れてはいるはずよ。」

それでも母親はテーブルに置かれた、サイズを作り直したドレスをじっと見つめていました。見かねたレギーネは強引に母親を広場まで連れていきました。

広場は多くの人たちで混雑していました。にぎやかな楽器の音色があちこちでなり響き、人々の笑い声があちこちで聞こえてきます。レギーネは母親の手を引いて、広場の奥にある舞台まで行きました。舞台ではちょうど村長が祭りの始まりを告げるところでした。

「みなのもの、よく集まってくれた。」村長さんが右手を上げると、周りはしんと静まりました。「今宵は存分に楽しんでほしい。これより、大祝祭を開催する。」

村中の人たちの歓声が沸きあがり、派手な音楽が再び鳴り響きました。広場では人々が円を描くように踊りはじめました。

「お母さん、いっしょに踊りましょう。」レギーネは母親の手を引いて、広場の踊りに加わりました。レギーネはこのお祭りがとても大好きでした。この日になると、いつも嫌なことをすべて忘れることができるからです。それに、いつもは仕事ばかりしている母親と一晩中踊っていられます。レギーネは音楽に合わせて精一杯踊りました。

しかし、そのとき大きな銃声が鳴り響きました。銃声は二度、三度繰り返されます。音楽は止まり、人々は不安な声をもらしました。そして舞台の上にビルデ公と他の貴族たちが現れたのです。

「みなのもの、緊急事態だ。静まれ！」はりつめた緊張感が場内を包み込みました。ビルデ公は神妙な顔つきで語ります。

「先ほど、預言者から使いが来た。その者によれば、この村に邪悪な力を持った魔女が村人全員をみな殺しにするという。」

村人たちから大きなよめきが起こりました。そして、村人の一人が叫びました。「殺せ！我らに災いをもたらす者を！」それにつられるように村人たちも叫びます。「殺せ！魔女を殺してしまえ！」

ビルデ公はそれを聞いて、満面の笑みを浮かべました。そして、村人たちを静めて言いました。

「あわてる必要はない。私はその者が誰か知っているし、その者が今どこにいるかも知っている。」ビルデ公はそう言って、ゆっくりと広場を指差しました。村人たちはゆっくりとその指先を追いかけます。すると、その指先にはあのレギーネの母親がいたのです。

## 5章

---

レギーネの母親はその場で村人たちに捕まえられました。そして、舞台に引っ張り込まれた母親は、白い布を頭にかぶせられ、膝まずくように命令されました。

「みなのもの、よく聞け！」ビルデ公が村人たちに向かって言いました。「これより、邪悪な魔女を抹殺する！」

村人たちはそれに呼応するかのようになんげに叫びました。

「殺してしまえ！」

「殺せ！殺せ！！邪悪な魔女を！」

レギーネは悲鳴をあげました。しかし、その声は村人たちの憎しみを込めた叫び声で打ち消されてしまいました。

「殺せ！魔女を殺せ！」

「殺せ！殺してしまえ！」村人たちは絶え間なく叫び散らします。

レギーネは捕らえられた母親をなんとか助けようと、人をかき分けて舞台の前まで行きました。

「やめてください！」レギーネは力のかぎり叫びました。「私の母は魔女ではありません！気が小さくて、やさしい人間なのです。」

しかし、その声に耳を傾ける者は誰もいませんでした。しだいに声はかれて、ただ涙だけが頬をつたいます。壇上では、男が剣を抜き、膝まずく母親の前でふりかざしています。

「ああ、お願い神様」とレギーネは願いました。「どうか、母を助けてください。」

しかし、そんなレギーネの願いもむなしく男は剣をふり降ろしたのでした。白い布のかたまりが壇上をころがり、レギーネの目の前で止まりました。村人たちになんげに歓喜の声をあげました。ビルデ公が村人たちの歓声に応えました。

「これでこの村は安全だ。みなもの者、今日の祭りを心から楽しめよ。」

そして、ビルデ婦人も姿を現し、村人たちに向けて嬉しそうに手を振りました。それを見たレギ

ーネは、体の中で燃えるような怒りを覚えました。ビルデ婦人は、昨日のドレスができなかったことだけで、自分の母親に死を与えたのです。レギーネの怒りは徐々に強くなっていきました。それはまるで全身が火で覆われているようです。

「燃えてしまえ！」とレギーネは低い声でつぶやきました。「ここにいる者たち、すべてを焼き払ってしまえ！」

レギーネは怒りに震えながら、何度もその言葉を叫びました。やがて、不気味な光がレギーネを包み込みました。そして、その光がいっせいに放たれたかと思うと、広場の周辺から激しい炎が燃え上がったのです。

村人たちは悲鳴をあげて、逃げ惑いました。しかし、炎はどんどん激しさを増し、村人たちを次々と飲み込んでいきました。

「助けて！お願い、助けてちょうだい！」

ちょうどレギーネのすぐそばで、ビルデ婦人が泣き叫んでいました。彼女は徐々に炎に飲み込まれようとしています。レギーネはそれを見て、ただ冷笑していました。

炎はそれからも激しさを増し、とうとう村全体を飲み込んでしまいました。そして、ただ一人レギーネだけが丘に登り、眼下で燃え上がる村を見下ろしていました。レギーネはその様を見ると、大きな声で狂ったように笑いました。そしてゆっくりと森の中へ入っていったのです。

## 6章

---

ドアがゆっくりと開きました。まぶしい光が暗闇の中に差し込んで、ルルは振り返りました。

「さあ、こっちへいらっしゃい。」

光の向こうからおばあさんのやさしい声が聞こえました。ルルは急いで部屋の中から出ました。そして、泣きながらおばあさんに抱きつきました。

「おやおや、お嬢ちゃん。ずいぶんと怖がらせてしまったようだね。」おばあさんはルルの背中をさすってやりました。そして、大きなため息をついて言いました。

「やっぱり、お嬢ちゃんには早すぎたかねえ。」

「あれは」ルルは震えた声で言いました。「おばあさんなの？おばあさんの小さい頃のことなの？」

おばあさんはゆっくりとおおきくうなずきました。

「さあ、そこへお座り。」ルルはテーブルの椅子に座りました。「お嬢ちゃんが言うとおりの、今のは、私の過去だよ。どうして私が森の中で一人きりで住んでいるか分かったらろう？」

ルルはうなずきました。おばあさんはさらに続けて言いました。

「人間というのはね、時に恐ろしい魔物に変わるんだ。冷酷で非情、残忍で粗暴な生き物なんだよ。」

おばあさんはルルの瞳をじっとにらみつけて言いました。

「だから、お嬢ちゃん、誰も信じちゃいけないよ。信じれば信じるほど、人は哀しい想いを強いられるのさ。」

ルルは訊き返しました。「誰も信じちゃいけないの？」おばあさんは獣のようにルルをにらみつけて怒鳴りました。

「絶対に信じちゃいけない！」

ルルはそんなおばあさんに恐る恐る言いました。「お父さんやお母さん、それにシリル兄さんは

どうなの？私は家族みんなを信じるけれど。」

おばあさんは突然、かっと目を大きく見開いて言いました。

「家族もだめだ！」

「どうして？どうして家族を信じちゃいけないの？私、お父さんもお母さんも、シリル兄さんも大好きよ。」

「分からない子だね。誰かを大切に想えば、それを失ったときにどうなるんだい？不幸になるだけじゃないか。そうだろう？」おばあさんは苛立たしく言いました。

しかし、それでもルルはじっと押し黙ったままでした。

「聞き分けのない子だね。」おばあさんは憎たらしげにそう言って、椅子から立ち上がりました。そして、ルルの腕を強引に引っ張って、再び奥にある部屋に閉じ込めました。

「おばあさん、開けてちょうだい！」

ルルは暗闇の中で必死に叫びましたが、やはりおばあさんからの返事は何もありません。暗闇の中には前と同じように、女の子が映っています。ルルはそれが小さい頃のおばあさんだと思いました。しかし、それをよく見ると、なんと自分とそっくりではありませんか。

ルルは自分に似た女の子をじっと見守りました。小さな女の子は森の一本道を一人で歩いています。そしてそこから遠く離れたところに、一人の少年がいました。シリル兄さんに似たその少年は、蝶々を追いかけてどんどん駆けていきます。そして、一本道からはずれた道をどんどんと進み、そのまま谷から落ちてしまいました。

「シリル兄さん！」ルルは思わず叫んでしまいました。「ああ、どうしてこんなことが！」

悲しみに暮れるルルの前に、今度はお父さんとお母さんの姿が映りました。二人はルルを無表情でじっと見つめていました。しかし、しだいに二人の髪の色が灰色になり、背が縮み出し、腰が曲がりました。そして、歯は抜けて落ち、皮膚はしわしわになり、とうとう二人の姿は砂のような灰になってしまいました。ルルは目を覆いながら、泣き叫びました。

「お父さん！お母さん！」

## 7章

---

ゆっくりとドアが開きました。ルルが急いで部屋をでると、おばあさんはつぶやくように言いました。

「みんな居なくなってしまうんだよ。お嬢さんがいくら誰かを大切に想っても、いつかはみんな消えてしまうさ。だから、誰も信じちゃいけない……。」

ルルはとても怖くなって、おばあさんの家から出ていこうとしました。おばあさんはテーブルから立ち上がって言いました。

「どこへ行くんだい？たとえどこへ行っても、お嬢ちゃんは苦しく悲しいことばかりだよ。ここへ居なさい。そうすれば、何も悲しいことはない。誰にも傷つけられはしないし、誰にも裏切られたりしない。それが一番の幸せなんだよ。」

ルルは黙って首を横に振りしました。そして、まだ雨が降りしきる中、もとの道に戻っていったのです。ちょうど道が二本に分かれているところまでやってきました。ルルは今度は右側の方の道へ進みました。その道を進めば、もとの家へ戻れます。あの孤独なおばあさんとも出会うことは二度とないでしょう。しかし、ルルはいったい何を考えているのでしょうか？右側の道を半ば進んだところで、引き返し、もう一度左側の道を通っておばあさんのところへ戻りました。

「おばあさん！開けてちょうだい、ルルよ。」ルルは戸を叩きました。すぐにおばあさんが顔を出しました。

「どうして戻ってきたんだい？」ルルは何も答えずに、強引におばあさんの腕を引っ張り、外に連れ出しました。

「何をするの？私はもう森の中から出ていかないよ。そんなことをしたら、私はまた不幸になってしまう！」

「不幸になんかならないわ、おばあさん。」

「私に信じればいいと言うのかい？あの心醜く、貪欲な人間たちを愛せと言うのかい？そんなことは、まっぴらだよ。」

「じゃあ、信じなくていいわ。ただ私といっしょに来てちょうだい。私といて、いっしょにいろいろなお話をしましょう。私、一人でいるときに、誰かとお話がしたいなあと思ときがあるの。おばあさんなら、きっといろいろと話せると思うわ。だから、いっしょに来てちょうだい。」

ルルはおばあさんを強引に引っ張っていきました。そしてルルとおばあさんはとうとう分かれ道までやってきました。

「さあ、おばあさん、こっちよ。」

ルルが右側の道を指差しました。しかし、おばあさんはそこから一步も動こうとしません。

「どうしたの？おばあさん。こっちの道を真っ直ぐに進めば、私の家があるのよ。」おばあさんは悲しそうな顔をして言いました。

「ありがとう、お嬢ちゃん。私はそっちの道にはいけないよ。だけど、お嬢ちゃんの心遣いは忘れない。ありがとうね。……本当にありがとう。」

おばあさんの姿はだんだんと薄く透明になっていきました。ルルがあっと叫んだときには、もうおばあさんは消えていなくなっていました。不思議なことに左側にあった道はもうありません。さっきまで降りしきっていたはずの雨もぴたりと止みました。

「おばあさん！」ルルは何度も叫びました。しかし、その声は森の中に響きわたるだけでした。日はもうすっかり暮れようとしています。ルルは薄暗くなった一本道を急いで駆けていきました。

## 8章

---

ルルがとうとう村までたどり着いた頃、家々には明かりが灯っていました。わが家にもいつもと変わらず灯りが灯っています。ルルはほっと胸をなでおろして家へ急ぎました。

「お母さん！」家に着くなり、ルルは台所にいた母親の胸に飛びつきました。

「おやまあ、どうしたんだい？帰りが遅いからちょうど心配していたところなんだよ。こんなに震えて、いったい何があったんだい？」母親はたずねました。

ルルは母親に、森の道が二本に分かれていたこと、そしておばあさんの小屋で見たものを話しました。

「おばあさんは私に自分の過去と私の未来を見せてくれたの。シリル兄さんは谷に落ちてしまったわ。お母さんやお父さんもいずれはいなくなってしまう！」ルルは興奮した様子で叫びました。

「ルル」母親はなだめるように言いました。

「それは夢よ。あなたは悪い夢を見たのよ。」ルルは激しく首を横にふりました。「夢なんかじゃないわ！私はついさっきまで、おばあさんといっしょにいたの。いっしょにいたんだから！」

「わかったわ。」母親は静かに言いました。そして、ルルを抱きしめました。

「ルル、たとえそれが本当であったにせよ、私もお父さんも、そしてシリル兄さんもずっとあなたのそばにいるわ。」

ルルは顔を上げて、母親の顔をじっと見つめました。「本当？私、一人ぼっちにならない？」

母親は微笑んでうなずきました。

「おい、いったいどうしたんだ？」騒ぎを聞きつけて、奥の部屋から父親がやってきました。

「ルル、どこへ行っていたんだ、遅かったじゃないか。」

ルルは父親の姿を見ると、すぐに抱きつきました。

「おいおい、いったいどうしたんだ？」父親は驚いてたずねました。

ルルはただ泣き続けます。母親が代わって父親に説明しました。父親はやさしく微笑んで言いました。

「ルル、何があったのかよく分からないが、誰もお前のそばからいなくなったりしないよ。ずっとお前のそばにいる。」

「でも！」ルルは言いました。「シリル兄さんは蝶々を追いかけるのに夢中になって、そして深い谷の底へ……。」

「深い谷の底へどうしたんだね？」父親がたずねると、ルルは階段の方を見つめたまま何も答えませんでした。

「お母さん、お腹すいたよ。夕食はまだ？」シリルがちょうど二階から降りてきたところでした。ルルはじっとシリルを見つめます。それは紛れもなく本物のシリルでした。

「どうしたんだよ、ルル。」シリルが不思議そうにたずねました。ルルはもう訳が分からなくなって、ぼう然と立ちつくしました。

「さあ、お母さん、夕食にしようじゃないか。準備はできているかい？」父親は言いました。

「ええ、今ちょうどスープが煮込みあがったところよ。さあ、こっちに来て、みんなで召し上がりましょう。」母親は居間のテーブルに夕食の準備を始めました。

「ルル、さあ、こっちへいらっしゃい。」テーブルに皿をおきながら母親が言いました。「そうだよ、ルル。早く食事にしようじゃないか。今日はけっこうなごちそうだよ。」シリルがテーブルに座って言いました。ルルはそれでも台所で立ちつくしていました。ルルの目には涙がいっぱいにあふれそうになっています。父親はルルの肩を軽くたたいて言いました。

「さあ、いこう。みんながお前を待ってるよ。」

それから、ルルは父親の手に引かれて居間へ行きました。

## 終章

---

父親が夢中で話し終えた頃、マリアはもうぐっすり眠っていました。あまりにも夢中だったために、父親にはマリアがいつ眠ってしまったのか分かりませんでした。

もしかしたら、マリアはお話を全然聞いていなかったかも知れません。そして自分が作ったお話など何も覚えていかもしれないのです。しかし、それでも父親は満足でした。愛する一人娘は今ぐっすりと眠りについていてます。それ以上望むべきものが父親にはありませんでした。

「マリア」父親は心の中で語りかけました。「お母さんが亡くなってから、お前にはいつも淋しい思いをさせているね。いつもすまないと思っているよ。」

マリアは心地よさそうに寝息をたてています。父親は再び娘に語りかけました。「だけど、お父さんはお前のためなら何でもするよ。お前が眠れないときは、いつでもこうしてお話をしてあげるからね。」

父親はマリアがすこやかに眠っているのを見て、立ち上がりました。そして部屋のドアを閉じる前に小さな声でささやきました。

「おやすみ、マリア。」